被災地での宿泊研修 – 復興支援ボランティア

合同防災キャンプの二日目の朝は、参加者全員で海岸清掃のボランティア活動を行いました。場所は、南三陸町の海水浴場「サンオーレそではま」。かつて年間約５万人も訪れた町のにぎわいの象徴ともいえる海水浴場は、東日本大震災による地盤沈下や砂の流出、がれきの漂着など壊滅的な被害を受けたため閉鎖されましたが、防波堤のかさ上げ等の復旧工事を経て平成２９年７月に７年ぶりにオープンしました。

参加者は、南三陸町商工観光課の方に指導をしていただいた後、サンオーレの名のとおり全長３００mの浜を歩き、数日前に開設期間を終了した海水浴場に打ち上げられた釣り糸や木片、遊具や海藻、さらに、隣接する公園や駐車場に落ちているゴミなどを一つ一つ回収しました。また、岩に挟まった漁網も、複数人で協力して取り除きました。

１時間ほど作業した後、自分たちの手できれいにした浜を散策したり、海に足を入れるなど、過去に津波が来たとは想像できないほど穏やかな南三陸町の海をしばし満喫しました。参加者は、海には、津波などの脅威とこのような恵みの双方があることに気が付きました。

南三陸町商工観光課
上席主幹　川野 久生さん

南三陸町は復興に向けて整備されつつありますが、被災地の現状を知ってもらうこと、それを周囲に伝えてくれることを、みなさんに期待しています。

※　海岸清掃ボランティアの後、４つのグループ（農業、漁業、物販、林業）に分かれ、一般社団法人復興応援団の佐野代表理事と学生スタッフ（東北大学等の大学生及び大学院生）のコーディネートにより、それぞれのボランティア先に向かいました

農業支援ボランティア　小野花匠園　（1・2 班）

農業支援ではまず、（株）小野花匠園　代表取締役の小野政道さんからお話を伺いました。主に菊の栽培・販売を手掛ける小野花匠園は、現在、地元だけでなく県内各地のスーパーやコンビニなど約４０店舗と直販契約を結び、お盆とお彼岸を中心に花束を出荷することで業務を拡大し、多くの雇用を生み出しています。この契機となったのが、東日本大震災。津波が自宅や農地の直前まで迫りながらも被害を免れた小野さんは、漁師の方など震災で仕事を失った人たちのために、残された農地で何かできないかと思い、加工販売体制の構築、販路の開拓により自身の農園を株式会社化し、職を失った方の安定した雇用を少しずつ進めてこられました。

小野さんからは、高い確率で発生すると言われている首都直下地震等において被災者となりうる参加者に対し、「大きな災害に遭っても、どうしようと立ちすくむのではなく、目の前のことを一つずつやっていけばおのずと復興は進んでいくと思います。」と実体験を基にした力強いアドバイスを頂きました。

午後は、ビニールハウスに移動し、お盆の時期に生長しすぎて出荷できなかった菊を畑から抜き取る作業を行いました。小野花匠園の神成 和彦さんから、「背の高いものは、ハサミで切り、低いものは直接抜く。」と作業手順を説明していただくと、参加者たちは、テキパキと役割分担をして作業を開始しました。

残暑の厳しい時期でしたが、参加生徒、参加教員及び事務局が一丸となり汗を流し、菊を抜く人、束ねる人、運ぶ人と連携し手際よく作業を進めたため、「さすが高校生、速い！」と神成さんが驚くスピードで、畑は見る見るきれいになりました。また、一部の生徒により、翌日に南三陸町旧防災対策庁舎に献花する花束を準備しました。

(株)小野花匠園
代表取締役　小野 政道さん

畑に残った菊を抜く作業は普段は二人で行っているので、本当に助かりました。皆さんにきれいにしていただいた畑には、12 月に咲く菊を新たに植える予定です。また南三陸町に来ることがあれば是非見に来てください。

漁業支援ボランティア　金比羅丸　（3・4 班）

午前中は、金比羅丸 代表の髙橋 直哉さんからお話を伺いました。髙橋さんは、津波によりカキ・ホタテ・ワカメの養殖設備を全て失ってしまったそうですが、全国から集まったボランティアや地域の人たちとの助け合いの力のお陰で、その年のうちには養殖事業を再開できたということでした。

また、ボランティアの人たちへの御礼として養殖で獲れた海産物を食べてもらったところ、「おいしい！」と言ってもらえたことで、髙橋さんは、南三陸の海の豊かさと楽しさを思い出したそうです。そして、震災で仕事が減り海から遠ざかっている漁師の仲間たちをこの海に呼び戻すために、また、もっと多くの方に南三陸の海の魅力を知ってもらうために、海産物の直販や観光客向けの漁業体験などの新たな事業をスタートさせたといいます。これらの話は、参加者が、災害時における地域間そして地域を超えた助け合いの必要性や、自然の持つ二面性について考える契機となりました。

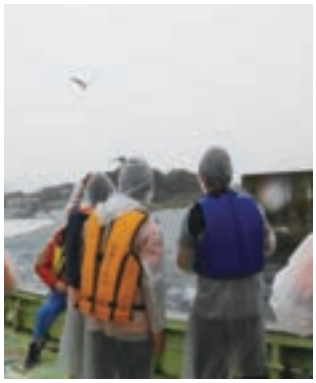
午後は、三つの班に分かれ、ホタテの養殖に使うロープの準備、収穫したワカメを詰めるパッケージのシール貼り及びワカメの袋詰めなどの作業並びに養殖場の見学を交替で行いました。

ロープにホタテを留めるピンを一つ一つ挿して準備するといった非常に根気のいる作業でしたが、参加者たちは、生産・収穫・販売に係るほとんどの作業を手で行うことに驚きながらも、髙橋さんや髙橋さんの お母さんの指導の下、熱心に取り組みました。

班ごとに、これらの作業を行うことで、段々と参加者のチーム意識も高まり、茎ワカメの袋詰めでは、ワカメの量を計る、袋に詰める、封をするといった担当に分かれて作業をするなど、お互いに声を掛け合いながら協力して作業を進めていました 。

午後になると天候が崩れてきましたが波は穏やかだったので、予定通り漁船で志津川湾内の養殖場を見学しました。カキの養殖場では、周囲の山から流れ込む豊富な栄養分によってカキがよく育つことを、ホタテとワカメの養殖場では、流れにもまれることでホタテ等が美味しく育つことなどを教えていただきました。

そして作業の後には、髙橋さんが獲れたてのホタテを試食させてくださり、南三陸の海の豊さを五感で感じました。参加者は南三陸の海の豊かさを、東京に戻って伝えたいと話していました。



金比羅丸
代表　髙橋 直哉さん

皆さんが笑顔で作業に取り組んでくださり、とてもうれしかったです。皆さんがピンを挿してくれたロープは秋に海に入れ、1 年後にはワカメやホタテが収穫できます。ボランティア作業は今日だけですが、皆さんとはワカメやホタテを通してまだまだつながっていきますよ。

物販支援ボランティア　たみこの海パック　（5・6 班）

まず、海産物の販売を行っている「たみこの海パック」の代表 阿部 民子さんの案内で、その作業場から民子さんの御自宅が見える場所まで歩き、震災時の自宅付近の被害や避難等の状況を説明していただきました。がれき等が錯乱していた地域は、徐々に整備・整地されていますが、参加者たちは、震災直後の写真と現在の風景を見比べることで、阿部さんたちを襲った津波の恐ろしさを痛感しました。

その後、作業場に戻り、震災時のつらいお話や事業を立ち上げた経緯などを、言葉を選びながら話してくださいました。震災時、津波にのまれる方を目の当たりにし、しばらくの間、何もかもをのみ込んだ海が恐ろしくて近寄ることすらできなかった生活を送っていたことや様々な方と支え合い、励まし合うことで、前向きな気持ちになり、「自分が南三陸町の復興のためにできることは何だろう？」と考えた結果、「漁師町を、漁業から復興させる。」、「自分も、海に関わる仕事をする。」という想いで「たみこの海パック」を始めたことなどを伺いました。

午後からは、二つの班に分かれ、交互に塩蔵わかめの袋詰め作業と、カキ養殖の原盤作りを行いました。

塩蔵わかめの袋詰めは、各自が衛生管理をしっかり行った上で、わかめの品質を見ながらより分ける作業、一定量を計って袋詰めを行う作業及び商品に仕上げる作業を分担して行いました。参加者たちが手掛けた商品は、後日、東京のスーパーに無事出荷されました。

一方、カキ養殖の原盤作りは、阿部さんの御主人の指導の下、穴を空けたホタテの殻と小さなパイプを交互に針金に通して重ねていき、カキの稚貝を種付けさせる原盤（採苗器）を作成しました。きちんと稚貝が付くには、重ねていくホタテの殻の向きも大事であることなどを学びながら作業しました。

塩蔵わかめの袋詰めを行う作業場とカキ養殖原盤作りを行う作業場は、少し離れていて、作業場を行き来する際、目の前には穏やかで美しい海が広がっていました。

しかし、「震災時はこの海が真っ黒になり、ものすごい音がしたと思うと、高い崖の上の方まで津波が襲ってきた。」という阿部さんの話を振り返り、信じられない気持ちで海を眺めた参加者も少なくありませんでした。

たみこの海パック
代表　阿部 民子さん

皆さんとお会いする機会は、自分自身を振り返る機会になっています。実際に震災を体験した私が、あの時のことを全部覚えているかというと、やはり忘れてしまっていることもあるのです。忘れたい部分が忘れられなくて、忘れないでとどめておかなければならない避難生活、仮設住宅での生活などは記憶が薄れてしまう。だからこそ、皆さんとこうしてお会いして話すことで、震災の記憶を風化させずにいたいと思っています。

林業支援ボランティア　南三陸森林組合、入谷 Yes 工房　（7・8 班）

午前中には、南三陸復興ダコの会の拠点である入谷 Yes 工房において、広報・デザインを担当する大森 丈広さんから南三陸復興ダコの会、入谷 Yes 工房の紹介をしていただきました。南三陸町では、家も仕事もなくなってしまった方が多い中、明日への希望を持つために元気に働く場が必要との観点から、廃校を利用した工房を設立し、合格祈願グッズ「オクトパス君」などの特産品、間伐材製品などの商品開発、製造等を行っているとのことでした。

昼食を挟んで午後は、Yes 工房から移動してヒノキ林において間伐作業を行いました。全員が長靴に履き替え、南三陸森林組合の佐藤 高さん、辺見 芳己さんの案内で山に入り、木々の間伐や枝打ちを行いました。間伐作業で使用するのこぎりなどは、震災時には、木造家屋等の倒壊により下敷きになった人を救出する道具となります。その使い方を学ぶ機会にもなりました。作業後半には雨足が強くなったため、終了予定時間を繰り上げ、南三陸まなびの里いりやどに立ち寄り、南三陸復興ダコの会 事務局長の阿部 忠義さんから、復興支援の活動を推進するに至った経緯や思いをお話ししていただきました。

林業は南三陸町の重要な産業であるとともに、“漁業を支える海”に栄養豊富な水を供給し、さらに CO_2 削減にも貢献しています。また南三陸町では、南三陸町森林組合と民間企業が協力し、約 10ha の森を整備し、森から出る間伐材でグッズを製作することで、新たな雇用も生み出しています。

午後からは、入谷 Yes 工房に移動し、間伐材を使用したワークショップに取り組みました。

南三陸復興ダコの会
事務局長
阿部 忠義さん

南三陸森林組合
佐藤 高さん

南三陸森林組合
辺見 芳己さん

ワークショップは、間伐材を材料としたスプーンやフォークの製作を通して、森林資源の有効活用について考えるというものです。木材の乾燥に時間がかかるため、残念ながら自分たちで間伐した木材ではなく、以前に間伐した木材を使用しました（参加者が間伐した木材は、後日、間伐作業をした方のワークショップ等で使用しました。）。しかし、山に入って木を伐り 、その木材を加工し、製品を作り出すという一連の作業を通して、山での学びが深まり、つながってきました。

最後に、作業を行った班ごとに活動を振り返り、発表を行いました。参加者は、大森さんに「町の魅力を引き出すため様々なことに挑戦し復興を進めているその活動は、大変だと思いますが、とてもすごいことだと思います。これからもこのようなすばらしい活動を続け、更に活気のある町にしていってください。応援しています。」と感想を述べました。

南三陸復興ダコの会／入谷 Yes 工房
広報・デザイン　大森　丈広さん

入谷 Yes 工房の活動のすばらしい点は、多くの方々との出会いがあること。私もそうした交流を通じて浮かんでくるアイデアをもとに、ワークショップを開催しています。スプーンやフォークづくりを通じて、私たちの活動を知ってもらい、そうした活動を通じて、この町の山の現状や、全国の山の現状も知って頂けたと思います。私たちもみなさんのおかげで、貴重な良い経験をさせてもらいました。

防災士養成講座［8］「災害とボランティア活動」

講師／環境・防災コンサルタント、元横浜市消防局 消防監、社会貢献学会 理事　秦 好子氏

合同防災キャンプ二日目の夜、社会貢献学会の理事や被災地の子どもを支援する神奈川市民の会の事務局長をされている環境・防災コンサルタントの秦氏による防災士養成講座「災害とボランティア活動」が行われました。

秦氏には、事前研修への同席、日中のボランティア活動への同行をしていただき、事前研修の各講師のお話や生徒たちのボランティア活動等も踏まえ、災害ボランティア活動について総括していただきました。

「ボランティアとは 、学びの機会であり、様々な年齢・立場の人たちと対等に行動する機会であり、自分の得意分野を知る機会、そして想像力を鍛える機会でもあることから、今後も災害ボランティア等を志してもらいたい。」というお話に、参加者は日中の充実感もあってか、前向きな気持ちになっていました。また、災害の教訓から学び、正しい想像力を鍛えることの重要性について、改めて認識しました。

被災地での宿泊研修　復興支援ボランティアの感想

●清掃活動ボランティア

サンオーレそではまでの清掃活動では、海岸のごみや、落ちているワカメなどを拾った。砂浜も海の水もとてもきれいで驚いた。今年の夏、天候の影響で訪れた人が少なかったのが、とても悲しかった。	生徒
砂浜が数十センチも地盤沈下したため、大量の砂を運び込んで整備して、７年ぶりに海水浴場として再開できたと聞いた。海水浴客のための設備や公園がきれいにできているのを見て、町の方々がこの海水浴場の再開のために何年も力を尽くしてきたのだと実感した。	生徒

●農業支援ボランティア

「育ち過ぎた菊」を抜く作業をした。ビニールハウス全部をやりきることができなかったのは悔しいが、抜いた花を包んだ袋が何個も積まれて達成感があった。これだけの量を農家の方たちは少ない人数でやっていたと思うと、少しでも力になれて良かったと思うし、働くことの大変さがよく分かった。途中で雨が降り、みんなの熱気もあってビニールハウス内の湿度が高くなり、眼鏡が常時曇っていたことや、作業後のあの泥臭いにおい、みんなと笑って汗びっしょりになりながら作業したことなどは一生忘れないと思う。この貴重な体験を自分の人生に生かしていきたい。	生徒
小野さんたちから、ガスや水等が止まった話を聞いて驚いたし、大変だと思った。同時に、首都直下地震が起こった時、ガスや水等が使えなくなるということを考えたら怖くなった。また菊の栽培については、班の人や違う班の人、先生方と協力して作業できたので良かったし楽しかった。あの時の達成感は今でも忘れられない。そして、その時に短い時間で、周囲とコミュニケーションを取ることの大切さも学んだ。	生徒
食べ物等を供給するのも大切だが、仕事を提供することも大切だし、勇気がいることだと思った。緑色の畑が２年前までは、がれきや泥だらけの畑だったと知り驚いた。	生徒
小野花匠園・小野さんたちの話は、津波の悲惨さを伝えるものだった。家の目前まで津波がきて、電気水道が止まってしまった。回復したのは３か月後だった。「子供たちのために」と、大人は流れてきた冷蔵庫の中から食べられるものを探したという。そんな話をたくさん聞いた後、夜の防災士養成講座で、一日目、二日目の振り返りをグループごとにまとめて発表した。班の人たちと協力するのはとても楽しかったし、他校であることなど関係なしに活発なグループワークとなったことは、リーダーのおかげだと思う。	生徒
ボランティア活動は初めてだったが、とても充実したものになった。ボランティア活動を通して学んだこと、感じたことは、今後の自分にプラスに働くことばかりだったので、これからは積極的にボランティア活動に参加したいと思った。	生徒
小野花匠園の取組について聞き、震災後、仕事を失ってしまった人たちのために、自分たちの仕事で雇用を生み出し、さらにここまで事業を発展させたことを本当にすばらしいと思った。これから地元だけではなく「被災地で育った花」として各地に広まってほしいと感じた。	生徒
多くのことを学んだボランティア活動だったが、一番は「何があっても諦めず、頑張り続けることである。」ということだった。今回、小野花匠園さんに、とても勇気をもらった。すばらしい体験ができて良かった。	生徒
震災後に、被災された近隣の方々の通年安定雇用と安定収入を目的とし、トマト、菊、フラワーアレンジメントなどの栽培に挑戦し、事業を拡大している様子を理解した。菊畑の片付けのボランティア活動では、参加者の学校・学年が異なるにもかかわらず、互いに積極的に声を掛け合いながら作業することができた。ボランティア活動の基本である、様々な年齢・立場の人たちと対等に作業を行うことの力強さを実感した。まさしく防災士養成講座で、秦好子先生から伺った講演の内容を疑似体験できた。	教員
被災により仕事をなくしてしまった方を雇用する。これは、仕事がなくなってしまった方にとっては不安なことばかりの中、仕事をすることで、金銭面だけではなく生きがいも与えることができるすばらしい取組だと思った。	教員

被災地での宿泊研修　復興支援ボランティアの感想

●漁業支援ボランティア

金比羅丸船長の髙橋さんのお話を聞いて、「地形の把握」と「前向きな思考」が大切だと学んだ。地形によって津波の波形も速度も変化するし、安全な高台の有無も変わるので、これは東京であっても大事だなと思った。ボランティア作業は、少しばかり手伝っただけなのにすごく大変。ロープ一つでも整備が大変。新鮮な海藻を消費者に届けるためにはたくさんの工程があり、その一つ一つを漁師さんが丁寧にやっていることを知り感動した。またお手伝いさせていただきたいと思う。	生徒
髙橋さんが「自分が直販を始めたきっかけは、多くのボランティアが来てくれた時、ワカメをふるまったことで、その魅力に気付かされたことだ。」と話してくれた。ボランティアは、ただ誰かを助ける存在だけではないのだと思った。	生徒
全体の被災状況は資料等から分かることもあるが、一人一人の３月 11 日は、実際にお話を伺わないと分からないので、とても貴重な体験となった。普段から挨拶できる関係は、少しの勇気を出せばつながっていけると思うので、災害の時に心細い気持ちを共有できるような人のつながりを大切にしていきたいと、お話を聞いて強く感じた。失ったものがあっても前向きに新しいことにチャレンジする髙橋さんのように、自分から積極的に地域のために動き、周りと一緒に少しずつでも進めていく、そういう人材になりたいと思う。	生徒
天候は今一つだったが、漁船に乗り、海を体で感じることができた。この海があのような姿になるとは考えられないほどきれいな海だった。また、金比羅丸船長の髙橋さんがとてもいい方で、自分もあんな人みたいになれたらと思った。	生徒
普段から、津波が来ることを意識して生活していたことを知った。漁師の方々は、津波についてポジティブに考えている面もあることに驚いた。	生徒
自分たちにとって大切な命を大量に奪っていった海で、今もなお危険を冒して仕事をすることは、とてもすごいことだと思う。僕も髙橋さんのような強さが欲しい。	生徒
髙橋直哉さんのお話の中で特に印象に残ったのは、「津波の話をする時には確かに重くなりがちだけれど、最終的には明るく前向きな方向に持っていきたい。」という言葉だった。津波の話題は決して明るいものではないのに、「津波がきてから学ぶことがあった。」と、前向きに、教訓として捉えている姿勢に驚いた。	生徒
震災時は、南三陸特有の地形のおかげで一命を取り留めることができたと話してくださった。海が近くてもすぐ山になっているから高く逃げることが可能だったのだ。地形を知っていたからこその避難である。また、海はがれきの山と化してしまったが、ここでは２年かかるがれきの除去が、半年から１年程度で終わったと教えてもらった。ボランティアの力である。やはり、人の力は何よりも大事な資源であると思う。しかし、歳月を重ねるごとに忘れられ、人々が離れてしまっているのも事実であった。これは復興の今後の問題点であり、地域を盛り上げることが今一番必要な復興支援なのだと思う。	教員

●物販支援ボランティア

民子さんの目の前で、知り合いの方が黒い津波にのみ込まれてしまった。その話をしてくれた時、「数年間は誰にも言えなかった。」と聞き、本当につらい思いをされたんだなと感じた。そんな中でたくさんの様々な話をしていただき、本当に感謝している。	生徒
何かあった時、一人では何もできない。民子さんのお話から、日頃から、地域や近くの住民とのコミュニティを作ることが大切だということを学んだ。過去や教訓から学び、将来に生かす。日本は地震が多い。その中で被害を少しでも減らすべく、国や地方自治体等が、たくさんの話合いの場などを設け、住民など多くの人の防災意識を高めていくことが大切だと思う。	生徒
地道な活動を一つ一つ積み重ねて今がある。それも、一人の力ではなくみんなで協力し合いながらやっていくことが大切なんだと、民子さんの話を聞いて感じた。	生徒
民子さんは、知り合いの方が目の前で津波にのみ込まれるところを見てしまった。暗闇になると、やっぱり怖くて眠れなかったという。「震災直後は、誰よりも涙を流したのではなかっただろうか。」とおっしゃっていた。それでも、これからもこの津波の怖さなどを伝えていくと話されたことが印象に残った。	生徒
民子さんから実際に津波にのみこまれた方を見てしまった話など 3.11 の話を聞いて、避難経路等も実際に歩いて見せてもらった。６年という時間は長いけれど、その記憶が薄れることはないのだと感じた。つらい話なのに私たちに話してくれたことが、うれしかった。また、物販作業のお手伝いでは、「いつもは少人数でやっているため、今回はたくさんできた」と聞き、民子さん御夫婦のお役に立てて良かったと思う。	生徒

被災地での宿泊研修　復興支援ボランティアの感想

非常に海の美しい場所で、この海が多くの人の命を奪ったということが、不思議に感じられるほどであった。ボランティア活動の前に作業場の周辺を案内していただき、被害状況についてお聞きしたが、道路工事や盛り土で風景が一変していた。この状況で、震災のことを語っていらっしゃる阿部民子さんの使命感を強く感じて心を打たれた。	教員

●林業支援ボランティア

入谷 Yes 工房で働く大森さんの語った「自分たちの手で被災地の元気を少しずつ取り戻していきたい」という言葉をすごく重く感じた。	生徒
初めて木を伐る経験をした。そこで学んだのは、普段、自分の暮らす地域で、山や木を意識することがあったか？ということ。私が住んでいる町田市には自然が豊富にあるが、林業を意識することはない。しかし奥多摩地域は林業が盛んであるように、地域で異なることに気付いた。防災は、それぞれの地域の状況を知らなければ適切な判断はできないと思う。被災地のことを考えることも重要だが、自分の暮らす地域を知ることから始めることが重要だと分かった。	生徒
震災をマイナスの体験とするかプラスの体験とするかは、その後の人々の取組次第だ。被害を受けながらも、前向きに私たちに体験談を話してくれるのは、皆さんが震災を乗り越えようとしている証しだと感じた。ボランティアというのは、被災地に力を貸すという一方的なものではなく、参加した人自身も多くを学ぶことができる双方にとって有益なものではないだろうか。	生徒
入谷 Yes 工房さんでは、震災後に働く場所がなかった主婦の方などに働く場を提供するとともに、地域で行える復興方法を考えてこられた。東京ではあまり地域の人と深く関わることはないように思うが、地域のつながりを大切にし、地域が行っているイベント等は積極的に参加したいと思った。	生徒
かつて廃校だった学校の校舎を基点に、「町のシンボル」が生まれるのはすごいことだと思った。また、地域の森林組合と連携して、お互いに利益をもたらし合いながら商売を発展させている従業員の方々もすごいと思った。	生徒
森に入って行った間伐体験では、木を伐らせてもらうという貴重な体験ができて良かった。この木が Yes 工房に運ばれて、コースターやストラップ等になるんだと思うと、ぐっと身近に感じられた。	生徒
林業支援では、林業にまつわる取組や、考え方も聞くことができた。入谷 Yes 工房では、住民自ら知恵を絞り、商品を生み出している。現在は、まだ大きな経済的利益はないとしても、自分たち自身が地元に残り、地元を盛り上げられるような環境作りは、今後日本各地で必要になってくることだと思う。	教員